

☆後期もプリントはHP「イクヲのプリント置き場」(https://kobun.webnode.jp)・「裏倉庫」(https://urasonko1.webnode.jp)の「授業の補助プリント」のページに、前日にはアップロードしていきます。

### 【後期の講義について】

1 各回、その文章を通して学べることを学び尽くす。(復習を丹念にしてください)

入試問題で(比較的)高得点を取る(目標)

→そのため必要なものは

- ① 単語力 ……前期・夏期で培った知識を、単語帳を繰り返すことで確実に
- ② 文法 ……前期で培った知識を確実に・さらにちょこちょこ付け足していく
- ③ 古典常識 ……テキストの文章の中で語っていく・ハンドブックを持っていてもいい
- ④ 自分で文章を追いかけて、話をつかまえる力

→後期は「共通テスト対策篇」で④に力を入れよう

★共通テストの選択肢を攻める戦略 (あまり必要なくなっているけれど)

2 予習はかならずすること。(後期はもう、本文をノートに写すということは必ずしも必要ではない)

- a とにかく文章を何度も読んで、「誰が誰にどうした」かをつかまえない。(後掲A・B参照)
- b 選択式の設定の解答は、「なんとなく」ではなく、本文を根拠に論理的に解答を導き、説明できるように。
- c 記述型の設問の解答は極力答案を作ってほしい。無理でも箇条書き程度で、「こんなことだろうな」とメモを作ってみよう。
- d 前回文章の途中で講義が終わって、一応予習をしてあっても、前日にもう一度丹念にその文章を精読してから講義に臨むこと。

3 復習は二段階で(あるいは何段階でも)。

- a まず講義後できるだけ早く、その講義を頭の中で再現しつつ、学んだ範囲の文章を読み返さない。
- b さらに、その文章の中で伝えられた学習項目をマスター。指示された単語や文法事項を調べ、マスターしなさい。
- c ある程度時間を置いてから(2〜4週間後、話を忘れた頃に)、白紙の本文を読んで、話を辿ることができ、的確に解答を導けるかどうか見直さない。その際、つかえる所や分からない部分があれば、何かが抜け落ちている。そこを再復習しなさい。

### 【古典(古文)とは】

A 古典(古文)とは劇である——と意識しよう・見ようとしよう(文章を頭の中で映像化しよう)  
テレビでドラマを見るときと同じように

場面(いつか・どこか・季節は)

登場人物(誰がいるのか)

何をしているのか(誰が誰にどうしているのか)

が見えていなくてはならない

場面を思い浮かべながら読む

(頭の中で常に文章を映像化)

→絵(図をかいてもよい)

B 古文(物語)を読むとはII文章から人間劇をつかみ取る作業をすることだ



【五】『大鏡』

とりあえず読んでみようか

A【理系にとっては参考・文系は一応頭に入れること】

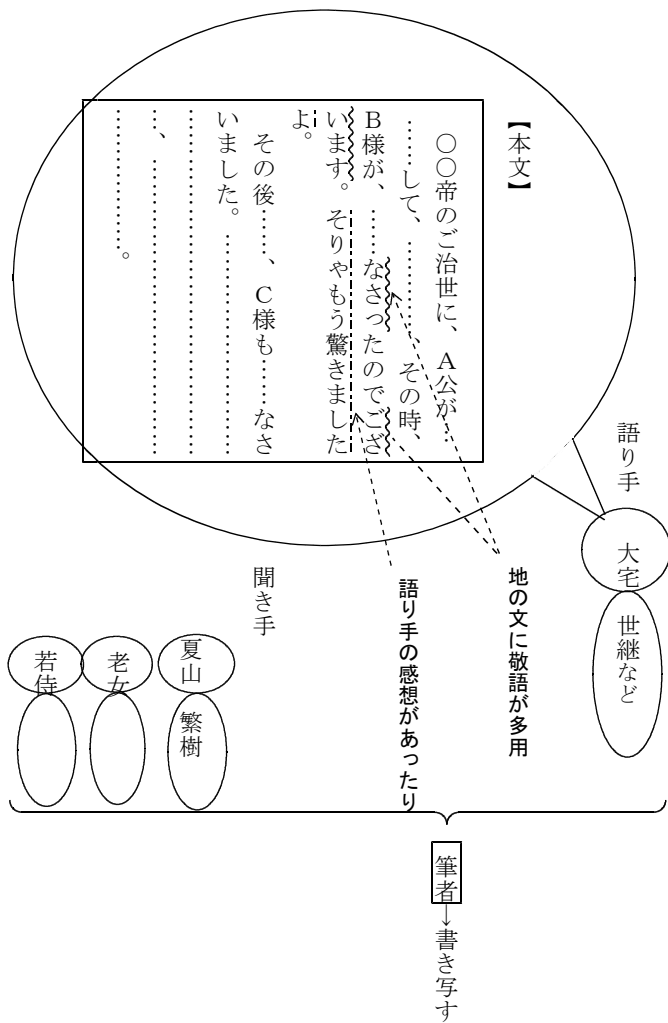
大鏡

(平安・後期) 作者不詳 歴史物語  
(特徴) 四鏡の初め

紀伝体(平安初期〜中期) (帝↓天皇紀・臣下↓列伝「○○伝」)  
藤原道長への賛美と批判

(形式) 道長の絶頂期のある日、雲林院の菩提講で出会った、大宅世継(百九十歳)と夏山繁樹(百八十歳)が若侍を交えて昔話として歴史を語ったのを、筆者が筆録したという形式  
↓地の文が語りの形式になっている(敬語の多用)

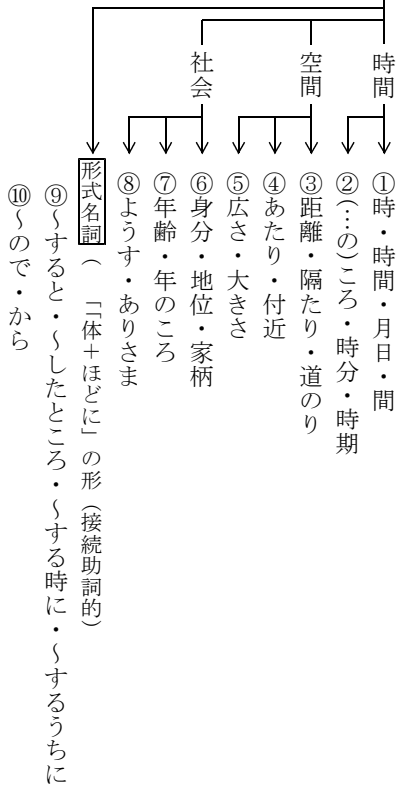
【大鏡】……老人が若侍を交えて、昔話として歴史上のエピソードを語る



B【古典常識】

\*三蹟…和様書道(平安中期)の三人の能書家、すなわち小野道風・藤原佐理・藤原行成。  
三筆…平安初期の三人の能書家、嵯峨天皇・空海・橘逸勢

4「ほど」【程】  
時間的・空間的・社会的  
程度・頃合い



5 わたる【渡る】 xからyへと移動する

- ① 渡る
- ② 移動する・行く・来る・通る
- ③ (年月を) 過ごす・経過する・生活する
- ④ ⑤ いらつしやる・おいでになる
- ⑤ (補助) 一面に及ぼす・し続け

6 こちなし【骨無し】 ①無骨である・無風流である ②ぶしつけである・無作法である

C【指示語に注意】

指示副詞 → 複合ラ変動詞 → ⑥

さ (然) <ソウ>	さり <ソウデアル>	さる <ソノヨウナ>
しか (然) <ソウ>	しかり <ソウデアル>	しかる <ソノヨウナ>
かく (斯) <コウ>	かかり <コウデアル>	かかる <コノヨウナ>

← いったいドウナノカ内容を明らかにすること

D【代動詞に注意】

「す・ものす」非「つかうまつる (謙讓)」「あそばす (尊敬)」 代動詞になることあり  
 ↓ 具体化してとらえよ (訳せ)  
 「あり」非「侍り (丁寧)」

例 馬にてもものせむへ馬で行こう 破子 (|| 弁当) などものすへ食べる  
 「……」とありへ言う・書く・詠む・聞く等

D かづく (四) ①かぶる ②(褒美・祝儀などを) いただく  
 【被く】(下二) ①かぶせる ②(褒美・祝儀などを) 与える

E 助動詞「る」「らるる」(下二段型活用)

接続: 「る」…四段・ラ変・ナ変の未然形 (四ラナ未接続) ↓ 「らるる」  
 「らるる」…それ以外の未然形 ↓ 「らるる・らるる・らるる」

意味: イ 自発へ (自然ト) | (ラ) レル・サレテナライ・セズニハイラレナイ・ツイーシテシマウ  
 ロ 受身へ | レル・ラレル | ハ 可能へ | デキル | ニ 尊敬へ | ナサル

- ・ a 意味の識別: 現代語の「レル・ラレル」を思い浮かべて何となく分かれば良い
- ・ 人間の心関係の語・無意識の動作とからむ時、自発であることが多い
- ・ 笑ふ・泣く・嘆く・驚く・思ふ…等+給ふ
- ・ 無理なら、四回訳していいのを選ぶ

\* 「れ給ふ」「られ給ふ」の「れ」「ら」れは普通尊敬ではない  
 イ いみじく思ひ嘆かるれど、いかがはせむ。へたいそう嘆かずにはいられないが、どうしようもない | 自発  
 ロ 問ひつめられて、え答へずなり侍りつ。へ問い詰められて、答えることができなくなりました | 受身  
 ハ 目も見えず、ものも言はれず。へ目も見えず、なにも言うことができない | 可能  
 ニ かの大納言、いづれの舟にか乗ららべき。へあの大納言は、どの舟にお乗りになるのだろうか | 尊敬  
 \* 「らるる」があれば、「らレル・ラレル」を思い浮かべ

F 助動詞「す」「さす」(下二段型活用)

接続: 「す」…四段・ラ変・ナ変の未然形 (四ラナ未接続) ↓ 「さす」  
 「さす」…それ以外の未然形 ↓ 「いさす・いさす」  
 意味: イ 使役へ (二) | セル・サセル | ロ 尊敬へ | ナサル・オ | ニナル

a 意味の識別の仕方

- i 誰かに何かさせている時 ↓ 使役
  - ii 尊敬語を伴わない「す・さす・しむ」 ↓ 使役
  - iii 尊敬語(「給ふ」「おはす」「おはします」等)が伴う時(例「せ給ふ・させ給ふ・しめ給ふ」) ↓ 尊敬が多い
  - iv 尊敬語(「給ふ」「おはす」「おはします」等)が伴う時でも、誰かに何かさせていたら ↓ 使役
  - i 妻のおなにあげて養はは。 <妻の老女に預けて育てさせる> ↓ 使役
  - ii 聞かせせ侍り。 <聞かせます> ↓ 使役 (「侍り」は丁寧語)
  - iii 御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。 <御簾を高く巻き上げたところ、(中宮は)お笑いになる> ↓ 尊敬
  - iv 題出だして、女房にも歌詠ませ給ふ。 <題を出して、女房にも歌を詠ませなさせる> ↓ 使役
- \* 「す・さす・しむ」(尊敬語伴わず) ↓ <セル・サセル>を思い浮かべ  
 「せ給ふ・させ給ふ・しめ給ふ」 ↓ (その人自身が) <ナサル>のか、  
 (誰かに) <サセナサル>のか、立ち止まって判断すること

G 押し

まし	未	用	止	体	已	命	型
(ませ)	ましか	○	まし	まし	ましか	○	特殊

接続… 未然形

意味… i 反実仮想(モシ) <タトシタラダロウニ>

イ 実現不可能な希望 <タライノニ・ヨカッタノニ> i のバリエーション

ロ ためらいの意志 <シタモノダロウカ・シヨウカシラ> ↑ 疑問語を伴う… 何・誰・や・か等…まし

a 識別の仕方

① 反実仮想文の公式「假定(…ば) — まし」にはまる ↓ 反実仮想 (最優先)

…ましかば
…ましかば  
…ませば
…ませば  
…せば
…せば  
…ば
…ば

↓

…まし

↑

…ましか

↑

…ませ

↑

…せ

↑

…ば

\* ましか || 反実仮想 ⊕  
 \* ませ || 反実仮想 ⊕  
 \* せ || 過去「き」 ⊕

② 左右以外のまし ↓ 実現不可能な希望 <— たらいいのにな >

③ 疑問文の中のまし ↓ ためらいの意志 <— しようかしら・したものだろうか >

- ① 鏡に色、形あらましかば、映らざらまし。 ↓ 反実仮想  
 <鏡に色や形があったならば、(何も)映らないだろうに >
  - ② ねたき。言はざらましを。 ↓ 実現不可能な希望 (↑ 反実仮想公式でも疑問文でもない)  
 <くやし。言わなければよかったのに >
  - ③ これに何を書かまし。 ↓ ためらいの意志 <これに何を書こうかしら >
- \* 「まし」はそれを見たら <く>を思い浮かべようとひとひとで言えない

J 否定法の「こそ」

…ばこそあらめ、
…ばこそあらめ、  
…こそあらめ、
…こそあらめ、

↓

…ましか

↑

…ませ

↑

…せ

↑

…ば

<く>ならばともかく・いいだろうが、  
 (実際はそうではないのだから)、……  
 <Xはいいだろうけど、Xならしかたないが、…… >

思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもまたほどなく失せて、  
へ(死んだ人を) 思い出して慕う人がいる間はよいだろうけれど、そんな人もたまたますぐに死んで……

【解答例】

問一 a エ b オ c オ

問二 【訳例】傍線部

問三 藤原通隆が、藤原佐理が遅参したことに對して、失礼だと思った。

問四 藤原通隆が、藤原佐理に、褒美として女装束を与えたということ。

問五 【訳例】傍線部

問六 ウ

【訳例】

(佐理大式は)ご性格が、怠け者、少しはだらしない人とも申し上げてしまつてよさそうでいらつしやつた。

故中関白殿(＝藤原道隆)が、東三条邸を修築しなまつて、障子に歌絵をお描かせになつた色紙形を、この大式(＝藤原佐理)にお書かせ申し上げなまつたのを、(佐理大式は)あまり人が多く騒がしくないうちに参上してお書きになつたらよかつたにちがいないのに、関白殿がお出ましになり、上達部・殿上人など、しかるべき人々が参集して後に、日が高くなるまで(関白殿たちを)お待たせ申し上げて参上しなまつたので、(関白殿は)少し失礼だと思ひにならずにはいられないけれども、そうであるといつてそのまま(＝不快に思つて描かせずに)いてよいことでもないのです、(書くように促し、佐理大式が色紙形を)書いてご退出申し上げなまつた時に、(関白殿が佐理大式に)女装束を褒美としてお与えになるのを、(佐理大式は)そうしなくてもきつとよさそうだと思ひにならずにいられないけれども、捨て置いてよいことでもないのです(受け取つて)、大勢の人の中をかき分けお出になつたのが、やはり、怠け癖ゆえの失態であつた。(佐理大式が)静かな朝のうち、早く参上してお書きになつたならば、このよう(に不体裁なこと)だつたのだろうか、いや、このようではなかつただろうに」と、(その場にいた)人誰もが思ひ、自分(＝大式自身)でも思つていらつしやつた。「身分がきわめて低い専門家、普通の身分が低い者などには、このようなことはなまつてよいだろうが」と、殿(＝藤原道隆)のことを非難申し上げる人々もあつた。

【五】の学習内容——左の項目を見て、自分で説明できるようになつてゐるか確認してください

□ 「大鏡」の語りの形式(理系は参考・文系は覚えておくこと)

□ 「三蹟」「三筆」(理系は参考・文系は覚えておくこと)

□ 「る」「うる」の意味の識別

□ 「す・さす」の意味の識別

□ 助動詞「まし」

□ 指示語「さ・しか・かく」

□ 代動詞

□ 「く(こそ)あらめ、……」「X(こそ)あらめ、……」

【D】『紫式部日記』——複数資料にチャレンジ

A 随筆・評論（非物語）の読み方

a 登場人物がない文章の場合

・素直に読む

・現代文と同じくテーマをつかまえ、筆者のイイタイコトをおさえていく

b 登場人物がある文章の場合

・日記の読みを応用↓「私（＝筆者）」が登場する物語として読む

B 複数資料↓恐がらない。要するに一つ一つの文章を古文としてまともに読めればよい

選択肢の一節一節を【文章】に書いてあったことに照らして「いけるか／駄目か」判断すればよい

3 もてなす

① 物事をとり行う・とりはからう・処置する ② 取り扱う・待遇する・世話をする

③ 振る舞う・見せかける・振りをする ④ 優遇する・もてはやす・ちやほやする

C 終助詞「ものー」グループ

体 **もの**の**もの**から**もの**の**もの**を↓逆接確定条件へノニ・ダガ・ケレド↓

つれなくねたき**もの**の**もの**忘れがたきにおぼす。

〈無情でうらめしいけれど忘れがたいお方だと思いいなる〉

\* 「ものを」は和歌の句末で、終助詞的に詠嘆へノニナア・ダナアのこともあえる

【E】『苔の衣』——貴族の恋愛と結婚・贈答歌・和歌の見立てを知る

A 貴族の亦心愛と結婚 【古典常識】

①垣間見(かいまみ)・噂や評判 …昔の女性は肉体関係を結ぶまで、親・同母兄弟以外には顔を見せなかった

②文・懸想文(けそうぶみ) …ラブレターを出す・和歌を付ける

③新 枕 …初めての共寝…呼ばふ求婚する…逢ふ・見る・語る…契る(男女が深い関係になる)の意も

④後 朝(きぬぎぬ) …共寝をした翌朝の別れ

↓後朝の文…共寝をした翌朝、仕事・家に帰った男から手紙(和歌)を送るのがマナー

⑤通 ふ …男が三夜続けて通って、正式な結婚となる・昔は、一夫多妻制で、通い婚が普通

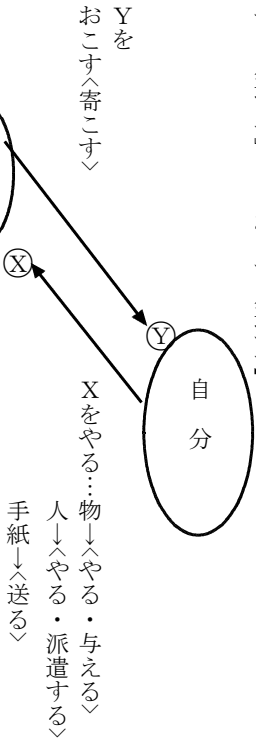
三日夜の餅の儀…三日目は男はゆつくり朝寝する・その夜、娘の親が結婚を祝い餅をふるまう

所願・露頭(ところあらはし) …娘の親が結婚披露宴を開く(妻の親族・友人を招く・男側は出席しない)

⑥相住み・相添ひ同居 相具す⇄連れ添う …これぞと思う妻だけでは同居することもあった。北の対に。

⑦音無し⇄音沙汰がない …通い婚であるため、男が通ってこなくなることもある。三年間男が通ってこない、結婚関係は自然消滅する。

B 【やる(遣る)】と【おこす(遣す)】



C 「くげなり」型形容動詞

形容詞しへい・ーだ

形容詞・語幹+げなりへーな様子である・ーらしい・ーそうだ

ナリ活用形容動詞になる

2 つつまし

【慎まし】

出来事感情をつつまし  
しておきたい気持ち

- ①気がひける・気がねされる
- ②遠慮される・はばかりれる
- ③きまり悪い
- ④気乗りしない

おぼつかなし

【寛束無し】

対象がぼんやりして  
いてとぼえどころがない

- ①ぼんやりしている・はつきりしない
- ②疑わしい・不審だ
- ③心配だ・気がかりだ・心もとない
- ④心細い・気にかかる
- ⑤待ち遠しい・会いたい
- ⑥疎遠だ・無沙汰している

様子



D【和歌】

・和歌はセリフ

登場人物のその時の「心情」の現れ↓そういう場面で人間がふつうどんな気持ちになるか

- ・ 心情語 (形容詞・形容動詞など)
  - ・ 述部 (区切れ)
- に注意

〈手順〉0まず、誰が、どんな状況で詠んだ歌か、をおさえる (最重要!) ↓その人物のその状況の心情が表現され

- ① とりあえず、五・七・五・七・七に切る
- ② 文法的・意味的に「。」にあたる部分は「。」を打つ——区切れを見つける (重要事項26P)
- ③ 倒置に注意しつつ、心情の表れ(≡心情語・述部に着目)として解釈する

\* 修辞 (縁語・掛詞・見立て) にも注意

F【和歌の修辞】

見立て…二つのものの共通点に着目し、あるものを他のものとみなして比喩的に表現する(↓「見立てる」「なぞらえる」という)。あるもの(自然)で他のもの(人間に関連すること)を意味する

霜

例 としを経て頭雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えにけり

答(むち)

〈年をとり、頭は雪のような白髪になっていても、霜ならぬ答を目の前にすると老いの身は冷えてふるえてきます〉

「白髪」を「雪」に見立てている(なぞらえている)、「頭の雪」が「白髪」を比喩している

「雪」「しも」「冷え」は縁語

☆物語の中で、誰かが和歌を詠み、その中に、字面そのままではぴんとこないもの(≡自然物——動植物、鳥など)があれば、見立てを疑おう

G和歌…「景」と「情」

古今和歌集(恋歌三) 清原深養父

序詞 干 干 干 序詞

満つ潮の流れひる間をあひがたみみるめの浦によるをこそ待て

干 干 干 寄る

満つ潮の流れひる間をあひがたみみるめの浦によるをこそ待て

「満つ潮」「流れ」「干る」「干潟」「海松布」「浦」「寄る」↓「海」の縁語

……「こ」が「恋歌」?

泣かれ 昼間 逢ひ難み 見る目 夜……情(人の気持ち)

満つ潮の流れひる間をあひがたみみるめの浦によるをこそ待て

干 干 干 寄る……景(自然・物)

\*いつでも和歌が「景」と「情」の二面を持つとは限らない。「景」ばかりの歌も、「情」のみの歌もある  
\*しかし、掛詞や縁語などを答えねばならない時。「景」と「情」という考え方はけっこう有効なことが多い

H「類推」の構文

Xだに・・すらい。まいて・まいて、Y……。

〈Xでさえ〜だ。まして、Y……。Yならなおさら〜だろう?〉

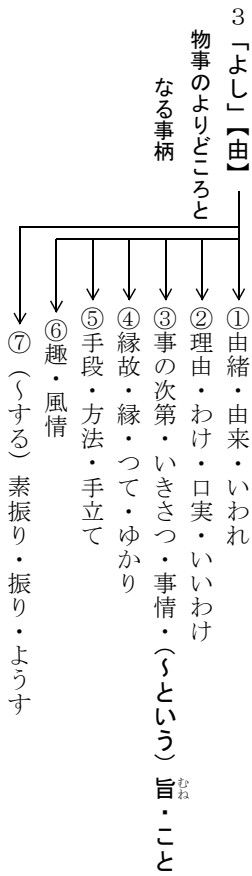


※【F】が終われば次は「基幹編」の【六】

鎌倉初期へかけてが歌合わせの最盛期で、それに伴って歌学も発達した。  
 (古典文学事典 事項編)

『在民部卿家歌合』 最大の歌合わせは建仁元年(1211)の後鳥羽天皇主催の『千五百番歌合』。平安末期から

【歌合】  
 平安・鎌倉時代、宮廷・貴族の間で盛んに行われた一種の文学的遊戯。左・右に分けた歌人の歌を、左右一  
 首ずつ組み合わせて何番かに構成し、各番ごとに優劣を判定する。判者の判定は勝・負。持(≡引き分け)で  
 示され、判定の論旨として判詞が述べられる。現在最古の歌合わせは仁和元年(895)の間に  
 行われた『在民部卿家歌合』。最大の歌合わせは建仁元年(1211)の後鳥羽天皇主催の『千五百番歌合』。平安末期から  
 鎌倉初期へかけてが歌合わせの最盛期で、それに伴って歌学も発達した。  
 (古典文学事典 事項編)



(作者が登場人物の心情やその場面の情趣を引き歌で表現することもある)

引き歌の表現する心情≡引用者の心情

D 引き歌…古歌(多くはその一部)を引用することを引き歌という

6 さるべき  
 = しかるべき

\*「〜」の挿入部分が、「——」のメイン部分に対する原因の推量となる  
 \*挿入句の下は普通ではないこと・異常なことが書いてあることが多い

C 挿入句



←係 疑問・反語  
 【体言 or 十】や/か  
 (あらむ) (あらむ) ↑—であるうか。(いやそうではない)  
 (ありけむ) (ありけむ) ↑—であったらうか(いやそうではない)  
 →が省略  
 ↑—ではなかるうか。(そうだよ) ↓  
 →コッチの訳がピタリくることもある  
 \*「あり」部分は「はべり・さぶらふ」「おはす」のこともありうる

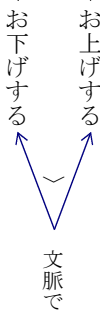
【六】『今昔物語集』

A 慣用的敬語：「参る」は「〇〇参る」でへ貴人のために〇〇し申し上げる・して差し上げる」の意で使われる

例

大殿油まゐるⓧ (へ貴人のために) 灯火をお灯し申し上げる

御格子まゐるⓧ (へ貴人のために) 格子を



4 めづらし【珍し】「愛づ」に対応する形容詞。なのでまずは①「賞賛すべきである・すばらしい」。そしてそ

ういうものはそうそうあるものではないので②「めつたにない・珍しい」。当然そういうものは③「目新  
しい・新鮮だ」ということになる。」

B ほととぎす【杜鵑・霍公鳥・郭公・時鳥・子規・杜宇・不如帰・杳手鳥・蜀魂】

(鳴き声による名か。スは鳥を表す接尾語)

カッコウ目カッコウ科の鳥。カッコウに似るが小形。山地の樹林にすみ、自らは巣を作らず、ウグイスなどの巣に産卵し、抱卵・育雛を委ねる。鳴き声は極めて顕著で「てっぺんかけたか」

「ほつちよんかけたか」などと聞こえ、昼夜ともに鳴く。夏鳥。古来、日本の文学、特に和歌に現れ、あやなしどり・くつてどり・うづきどり・しでのたおさ(死出の田長)・たまむかえどり・夕影鳥・夜直鳥などの名がある。(季語 夏。万葉集(二)「暁に名告り鳴くなる」)

ほととぎす鳴くや五月の菖蒲草あやめも知らぬ恋もするかなへ古今・恋

五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞするへ古今・夏

宿りせし花橘も枯れなくななどほととぎす声絶えぬらむへ古今・夏・大江千里

7 用々さす(接尾語) へ動作をしかけて途中でやめる意・——しかける

B 傍線部問題に関する注意事項(傍線部自体をしつかり解釈することも大切だが、さらに)

i 傍線部を含む一文を押さえよ(その傍線部の主体・客体は何かということも大切)

ii 傍線部に指示語がからむときは↓その指示内容を明らかに

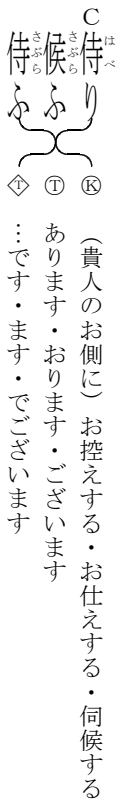
2 去奉るⓧ 差し上げる(「与ふ」の謙讓)

◇ くし申し上げる・おくする・くしてさしあげる

ⓧ 召し上がる(「食う」の尊敬)・お召しになる(「着る」の尊敬)・お乗りになる(「乗る」の尊敬)

3 かづく (四) ①かぶる ②(褒美・祝儀などを) いただく

【被く】(下二) ①かぶせる ②(褒美・祝儀などを) 与える



【解答例】

問一 1 しだいに

2 目新しく

問二 2 御格子を下ろしてさしあげるのを途中でやめて

6 上にお召しになっていた紅色のお召し物一枚を脱いで

7 たいそう声を大にしてほめそやしたのだった（口を極めてさかんに誉めた）

問三 たった今鳴いたほととぎすについて、すぐに歌に詠むこと。

問四 「あれは誰か」という意味の黄昏時に、その問いかけに応じて名告りをするように鳴くらしいなあ。

【六】の学習内容

□慣用的敬語「〇〇参る」

□ほととぎす：鳴き声・時期・花橘との関係

□傍線部問題に関する注意事項

□敬語「奉る」「侍り」「候らふ」（複数の意味・敬語の種類を持つ敬語）

□係助詞「や・か」の文末用法

□古語「―さす」「―はつ（果つ）」「かづく」など

【通釈】

今となつては昔のことだが、御堂（＝藤原道長）が、大納言で一条殿に（嬪として）（通い）生活なさつていた時、四月の一日ころ、日が次第しだいに暮れるころになつたので、家人たちをお呼びになつて、「御格子をお下ろしいたせ」とおっしゃつたところ、祭主の三位輔裁が勘解由の判官であつたのだが、参上して、（道長のいる）御簾の中に入って、御格子を下ろしていたところ、南向きの部屋の（の前の）梢に（この時期には）目新しくほととぎすが、一声鳴いて飛んでいったので、殿（＝道長）は、これをお聞きになつて、「輔親はこの（ほととぎすの）鳴く声を聞いたか」とおっしゃつたところ、輔親は、御格子を下ろしてさしあげるのを途中でやめて、ひざまずいて、「お聞きしました」と申し上げたので、殿は、「それでは（ほととぎすについての歌を詠むのが）遅いぞ」とおっしゃつたところ、輔親は、このように申し上げます。

あしひきの……山のほととぎすは（まだ初夏だというのに早くも）人里に慣れて、夕暮時に名乗りをして  
いるらしいなあ。

と。殿は、これをお聞きになつて、たいそうお誉めになつて、（自分が）上にお召しになつていた紅色のお召し物一枚を脱いで、（褒美として輔親に）お与えになつたところ、輔親は、（それを）いただいて、伏し拝んで、御格子をお下ろし申し上げ終えて、（いただいた）御着物を肩にかけて、家人の詰所に出たところ、家人たちがこれを見て、「これはどうしたことだ」とたずねたので、輔親が、さきほどのことを語つたところ、家人たちは皆、（その話を）聞いてたいそう声を大にしてほめそやしたのだった。

## 【七】『枕草子』

A 枕草子 (理系にとつては【参考】・文系はここに書いてあることくらいは暗記しておいてね)

成立→平安(中)(一〇〇〇年頃)

筆者→清少納言(一条天皇の中宮定子に仕えた女房。父は、村上天皇の命を受け源順らとともに「後撰和歌集」の撰進にあたった歌人清原元輔)

ジャンル→随筆(約三〇〇の段からなる)

物尽しの段(「うなも」ではじまる) ↑「うなも」のイメージに基づいて読む

随想的な段(いわゆる随筆の部分) ↑素直に読み、現代文と同じようにイタイコトおさえる

日記的な段(一条天皇の中宮定子に仕えた女房としての日記) ↑日記として読む

\*わが国最初の随筆文学

\*明るい機知を含んだ「をかし」の精神

\*『方丈記』『徒然草』とともに三大随筆と言われる

B 日記系読解 (の基本) ∴日記・紀行文・随筆(登場人物のあるやつ)

∴「私(≡筆者)」が登場する物語として読む

↓いきなり主語なし・尊敬語なし述語↓主語は「私」

地の文中で、自分の行為に尊敬語は使わない

(例外)「和泉式部日記」∴主人公「女」(≡筆者)と「宮」(≡敦道親王)との恋物語。筆者が見ることので

きない宮の様子や心情まで描写されている。

①「女」と「宮」の恋(足かけ十ヶ月)を描いた歌物語(和泉式部は当時の代表的な女流歌人)として読む

②主語無し述部(尊敬語なし)↓主語「女」

〃〃〃(尊敬語あり)↓主語「宮」

(例外)「土佐日記」∴筆者紀貫之が、貫之の旅にお供する女性のふりをして書いている(ゆえに「私」≡架空の女性)。貫之は文中「船君」などと表記されている

## C 【主語判定のしかた】

①登場人物を整理↓人は□で囲む・一覧表や図にする \*呼称の言い換えにも注意

②場面を思い浮かべて(絵を描いてもイイ)

③全述部・全発言について判定

a 接続助詞・前との続き具合で(「ば・ども・が・を・に」の前後では主語が変わりやすい)

b 引き算で→登場人物一覧からその主語になり得ないものを引いていく

c 敬語によって→登場人物によって、敬語を使ったり使わなかったり・レベルが違ったり

自分の動作に尊敬語は使わない

セリフの中では、相手の動作には尊敬語を使う

d 後ろからさかのぼって判断

e 古典常識によって

f 文法的判断によって

g リード文や注のヒントによって

h その他の知識(文学史・日本史)によって

……**でも**やり方を使っても良いとこかく理詰めでもドラマとしてつじつまの合う判定を

☆物語冒頭にいきなり主語なし述語↓**主語(主語)≡主人公**と考えて読み進めよ。矛盾が生じれば、修正する

3 はやく  
 はやう  
 ① ずっと前・以前・昔  
 ② すでに・とつくに・前に

③ (多く、文末に「けり」を伴って) 事実・真相の気付きを示す。なんとまあ・実は・驚いたことに

D 【代動詞に注意】(再)

「す・ものす」非「つかうまつる(謙讓)」「あそばす(尊敬)」  
 「あり」非「侍り(丁寧)」  
 ↓代動詞になることあり  
 ↓具体化してとらえよ(訳せ)

例 馬にてもせむへ馬で行こう 破子(〓弁当)などものすへ食べる  
 「……」とありへ言う・書く・詠む・聞く等

E 終助詞「もの」グループ

体 **もの**の・**もの**から・**ものを** ↓逆接確定条件へノニ・ダガ・ケレド  
 つれなくねたき**もの**の忘れがたきにおぼす。  
 <無情でうらめしいけれど忘れがたいお方だとお思いになる>

\* 「ものを」は和歌の句末で、終助詞的に詠嘆へノニナア・ダナアのこともある

F 絶対敬語…使う相手(敬意の対象)が決まっている敬語

表たす…「帝・院(上皇法皇)に」申し上げる  
 啟あす…「皇后・皇太子などに」申し上げる

みゆき(尊) 行幸…帝(天皇)のおでかけ  
 御幸…院(上皇・法皇)のおでかけ

行啓…中宮(皇后)・東宮(皇太子)のおでかけ

G 二つの「給ふ」

給ふ (四) 尊敬 (本動詞) お与えになる・下さる(「やる、与ふ」の尊  
 (補助動詞) くなさる、おくになる

(下二) 謙讓(丁寧)(補助動詞) します・ております  
 (会話・手紙の中で)  
 話し相手に対して、自分をへりくだって述べる時に使う)  
 話し相手(聞き手・手紙の読み手)に対する敬意を表す  
 ↓「話し相手に」に注目すると、丁寧語  
 「へりくだって」に注目すると謙讓語ということになる

↓自分の「思ひ・知り・聞き・見」+「給へ」「給ふる」「給ふれ」の形

例 ……は知り給はず。 「(〇〇)は ……のことはお知りにならない」

……は知り給へず。 「(私は) ……のことは知っておりません」

活用表は

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段・尊敬	たまは	たまひ	たまふ	たまへ	たまへ	たまへ
下二・謙(丁寧)	たまへ	たまへ	〇	たまふる	たまふれ	〇

↓何形であっても重なっているものはないので、識別できない場合はない

【七】の学習内容

- 日記系読解の基本
- 主体判定のしかた
- 副詞「はやく・はやう」
- 代動詞（復習）
- 終助詞「ものー」グループ（復習）
- 絶対敬語
- 二つの「給ふ」

【通釈】

（私が）まだ暗いうちに起きて、（使用人に）折櫃などを携えさせて、「これにその（＝雪山の）白いようなところを入れて持って来なさい。汚そうなところはかき捨てて」と言つて（中宮職に）行かせたところ、（使いにやった者が）たいそう早く持たせてやったものをぶら下げて、「すでに（雪は）なくなつてしまいましたよ」と言うので、実に驚きあきれたことで、面白く詠んで、人にも語り伝えさせようと苦吟していた歌も、嘆かわしくも甲斐のないことになつてしまった。

「どうしてそうなつたのだろうか。昨日まではあれほどに消え残つていたようなものが、夜の間に消えてしまつてるとかいうことよ」と力を落として言つと、「木守が申しましたことには、『昨日、とても暗くなるまで（雪山は）ございました（消え残つていました）。褒美をいただこうと思つていたのになあ』と言つて、手を打つて（悔しがつて）騒いでおりました」などと言つて騒ぐうちに、内裏から（中宮様の）お言葉がある。

「それで、雪は今日まで消え残つているか」とお言葉があるので、実にしゃくで残念であるけれど、『（旧）年内、元日までさえ消え残らないだろう』と人々（＝女房たち）が中宮様に申しあげなされたのに、昨日の夕暮れまで消え残つておりましたことは、実にたいしたことだと（私は）存じます。今日までというのは、出来すぎです。『夜の間の人に（私の勝ちを）ねたんで取り捨てたのです』と中宮様に申し上げてください」などのご返事申し上げた。



【H】『源氏物語』「柏木」

A 出家

世俗の世界を捨て、仏門に入ること。古典世界では多くの人物が、この世に絶望したため、心の平安を得るため、死後の安息を願って、などさまざまな理由から出家をしている

此岸しがん 〓 迷いの世界  
= 俗世：汚れた所・つらい所

↑ 厭離穢土おんりえど

彼岸ひがん 〓 悟りの世界  
= 仏の世界：清らか・平安

↑ 欣求淨土こんぐじょうど

……死後この世界へ行けることが願い

西方淨土：阿弥陀の淨土は西方にあると信じられた

「池の中に蓮華あり、大きさ車輪の如し」(阿弥陀経)

☆ 出家とは生きながら死ぬ(俗世を離れ、仏の世界に入る・仏弟子になる)こと

縁 〓 すべてを捨てる (すべての執着を捨てる)  
{ 財産 権勢 }

↓ 残される家族としては、その人が死んだに等しいくらい悲しいこと

【「出家する」を表す慣用表現】

世

す つ (捨つ)  
そ む く (背く)  
は なる (離る)  
の が る (逃る)  
い と ふ (厭ふ)  
い づ (出づ)

頭

あたまをまるむ (丸む)  
かしらおろす (下ろす)・

身 様 形

髪をおろす・落とす・かざりおろす  
か は る (変はる)  
か ふ (変ふ)  
す つ (捨つ)  
や つ す (棄す)

そむきすつ (背き捨つ)・そむきはつ (背き果つ)  
入道す・家をいづ (出づ)・ひじる (聖る)

二 あぢきなし

人の力や自分の心ではどうしようも

ない状態や、

それに対する苦々しい気持ち

あきらめの気持ち

- ① (人の力や心では) どうすることもできない・どうにもならない
- ② (どうしようもないので) 不快である・にがにがしい
- ③ (努力ではどうにもならず) 無益である・むなし
- ④ (思い通りに行かないが) どうしようもない・仕方がない
- ⑤ (どうにもならず) 張り合いがない・つまらない

B 注意すべき同音異義語「ながら」と

事 言 異 殊  
文脈に応じて判断  
格別に・特に

C 接続助詞「ながら」

c 動詞用

形 形動の語幹

ながら

同時並行へシナガラ  
逆接へノニ・ケレド

そのままへソノママデ・ソソククリソノママ丸ゴト全部

身はいやしながら母なむ宮なりける。へ身分は低かつたけれど母は皇族であったへ逆接  
旅の御姿ながらおはしましたり。へ旅のお姿のままであつたへそのまま

【帳台】





【解答例】

問一 【訳 例】内傍線部

問二 才

問三 心静かに仏道修行をして暮らしたいという思い。

問四 【訳 例】内傍線部

問五 (1) 宮の北の方が亡くなり、火葬されたということ。

(2) 「消え」が「煙」の縁語になっている。

問六 才

【訳 例】

こうしているうちに、お住まいになっている宮殿が焼失してしまった。ただでさえつらい世の中に、まったくどうしようもなく、移り住みなさることができそうな所でまますまな所もなかったので、宇治という所に風情のある山荘をお持ちになっていたのにお移りになる。見切りを付けなされた世の中であるけれども、もはやこれまでと住み離れてしまうようなことをしみじみお思いにならずにはいられない。

(移り住んだ場所は) 網代が近くにあるようである。その水音が耳にやかましい川のほとりで、静かな思いにはそぐわない面もあるけれど、しかたがない。花・紅葉、それに水の流れにも、気を晴らす手立てを求めて、まますま物思いをなさる以外のことがない。このように(世間との交際も) 絶え引き籠もった野山の果てでも、故人(≡北の方)がいらっしゃったならば(こんなに物思いにふけることもなかった) だるうに・どんなにか心慰められたことだろうに) と思い申し上げない時はなかった。

見し人も……妻としたあの方も住んでいた邸も煙になってしまったのに、どうしてわが身は消え残ったのだろうか。

生きている甲斐がないと(亡き北の方に) 思い焦がれなさることよ。

(京にいた頃よりも) いっそう、山また山が重なっている(今の宇治の) 御住まいに、訪れ参上する人はいない。いやしい下衆などや、田舎じみた山賤(≡山住みの身分のいやしい者) たちだけが、まれに親しんで参上し、お仕え申し上げる。(八の宮が) 峰の朝霧の晴れる時がなく(あの歌のように、世の中に対するつらさがまったく尽きない思いで) 日々を送っていらっしゃるが、この宇治山に、いかにも聖(≡山林に隠遁する苦行僧) らしく見える阿闍梨が住んでいた。(その阿闍梨は) 学識がたいそうすぐれていて、世の中の評判も軽くないけれど、ほとんど朝廷の仏事にも出仕せずつと籠もっていたところ、この宮(≡八の宮) がこのように(自分に) 近い所にお住まいになって、寂しい御様子で、尊い仏道修行をなさっては、法文を読み学んでいらつしやるので、(阿闍梨は八の宮の求道心を) 尊くお思い申し上げて、常に(八の宮のもとに) 参上する。

(八の宮が) 長年学び知りなさっているいろいろなことの深遠な意味を(阿闍梨は八の宮に) 説き聞かせ申し上げ、まますまこの世(≡現世) がまったく仮のものでもむなしことを(八の宮に) お教え申し上げるので、(八の宮は) 「心だけは(極楽浄土の池の) 蓮の上ののぼったような思いになり、(実際、極楽浄土の) 濁りのない池にも住むことができそうだけれど、まったくこのように幼い人々(≡二人の娘) を(この俗世に) 見捨てるような心配さだけのために、思い切って出家することもできない」など、(八の宮は) 隠すところなくお話しになる。